

自らの進路をきりひらく確かな学力の育成

－ 基礎学力の向上をめざして －

御所市立御所中学校

1. 本校の実態と課題

本校には、「学習意欲がない」「学習規律ができていない」など学習面に課題のある生徒が見られる。年度頭初に行った3年生の実力テストの結果を見ると、約16%にあたる生徒が5教科の合計点数が2桁台であった。これらの生徒は、国語・数学の基礎的な問題（計算・漢字）に答えられていない状況がある。また、無解答率が高いという傾向がある。1・2年生においても、同様の傾向にある生徒が多数存在する。このような実態を踏まえ、本校では、以前より生活面の課題と学習面の課題を克服するための手立てについて検討してきた。しかし、現実には基本的な生活習慣の改善に重点が置かれた指導がなされ、「規範意識」と「学習意欲」の関連に重点を置いた指導がほとんどなされていなかった。また、低学力傾向を克服するという視点から取組を行っているものの十分な成果を得ることができていない現状があった。

そこで、本年度は「学習意欲の喚起と基礎学力の定着」、「規範意識と学習規律」を中心課題として設定し、生徒自らの将来に展望をもてる学力の定着を目指す取組を進めた。

なお、取組を進めるに当たっては以下の点に留意した。

- 「奈良県学校改善支援プラン」の活用
- 市教育委員会や県教育委員会・研究諸機関との連携
- 全国学力・学習状況調査の結果の分析・検討
- 自校生徒の生活状況の分析・検討

2. 取組内容

(1) 具体的な取組内容について

本校では、「奈良県学校改善支援プラン」を参考に、教育内容・指導方法の工夫・改善に努めてきた。今回の取組では、本校の実態と全国学力・学習状況調査結果の分析を踏まえ「学習意欲」、「学力向上」、「規範意識」の三つの視点から具体的に取組を行った。各視点における取組内容とねらいについて、以下に示す。

【視点1：学習意欲に関して】

- ① 各教科の年間学習指導計画（シラバス）の作成と保護者・生徒への年間学習指導計画の提示
- ② 生徒個々の学習のつまづきを明らかにするための「進路ウイーク」の実施

【視点2：学力向上に関して】

- ③ 基礎学力定着を図るための「基礎学習」の実施
- ④ 言語力の育成を図るための「朝読書」の実施
- ⑤ 生徒個々の学力向上を図るための「習熟度別少人数指導」の実施
- ⑥ 定期テスト前・長期休業期間を利用した「学習会」の実施

【視点3：規範意識に関して】

- ⑦ 低学力傾向と学習規律の関連についての実態分析・考察

【視点1：学習意欲に関して】

①については、保護者・生徒を対象に本年度実施している学習内容を周知してもらうことが目的である。このことによって、今行われている授業内容や今後の授業内容が明

らかになり、保護者が学校で実施されている学習内容を知ることができると考えた。また、生徒の学習内容に対する興味や関心を高めることにつながると考えた。

②については、生徒個々の学習のつまづきを明らかにし、学習目標の設定をすることが目的である。定期テスト後の生徒と教員の2者面談を通して、今後の学習課題を設定するとともに、進路に対する展望をもたせることを目指している。また、定期テストの結果をもとに日々の学習でのつまづきや学習の具体的対策・方法について共に考える機会としている。この取組は、生徒の「学習意欲」を高めることにつながると考えた。

【視点2：学力向上に関して】

③については、基礎学力の定着が目的である。放課後、毎日20分の学習（1・2年生は国語・数学・英語、3年生は国語・数学・英語・社会・理科）を実施することで、授業内容の基礎的な部分の定着を図ることを目指している。また、問題作成データベースからダウンロードした資料を活用することで、家庭学習の定着が図れると考えた。

④については、今日の教育課題となっている言語力の育成の観点から、読解力の育成が目的である。「朝読書」の実施によって、生徒の言語力の育成はもとより、豊かな感性の育成という多様な学習効果をもたらすと考えた。

⑤については、2・3年生の数学を対象に基礎学力の向上ということを目的にした取組である。この取組によって、生徒個々の能力に応じた学習が可能になると考えた。

⑥については、習熟が遅れている生徒等に、個別に学習支援を行うことを目的としている。平素より個別に家庭訪問等で学習支援を行っているが、教科担任制の中学校では、十分に対応しきれていない。そこで、長期休業中に複数の教員がグループ学習指導を組織的に行うことによって、学習進度の遅れが目立つ生徒に対応しようと考えた。

【視点3：規範意識に関して】

⑦については、自校の最重点課題となっている「低学力傾向と生活課題」の問題の克服を目的としている。チャイム着席、授業準備物等の学習規律を徹底することによって、学習に集中できる環境を作り出したいと考えた。このことが「学習意欲」や「学力向上」に影響をよりよい与えると考えた。

(2)実践の評価に関する取組について

具体的な取組を行う際、「学習意欲」「学力向上」「規範意識」の3点の視点に基づいて実態調査を行い検証した。

【視点1：学習意欲に関して】

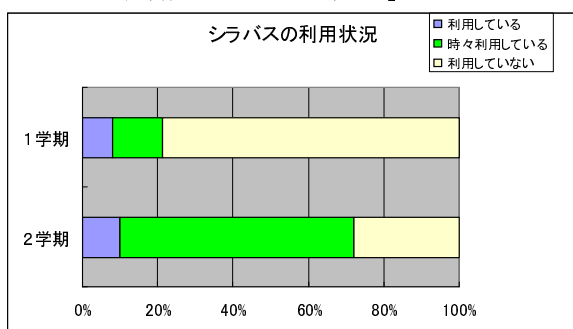
①評価の視点

「学習意欲」にかかわる取組について具体的な評価を行うために、以下の項目に着目して実態調査を行い検証した。

- ア シラバスの利用についての調査
- イ 学習に関する意識調査

②結果

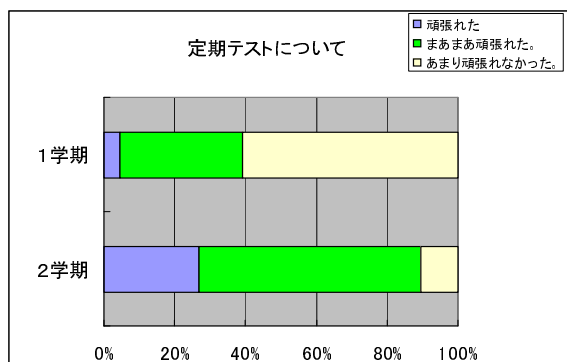
【シラバス利用についての調査】



※実施対象：全校生徒（339名）

1 学期		
1. 利用している。	2. 時々利用している。	3. 利用していない。
27人	45人	267人
2 学期		
1. 利用している。	2. 時々利用している。	3. 利用していない。
34人	210人	95人

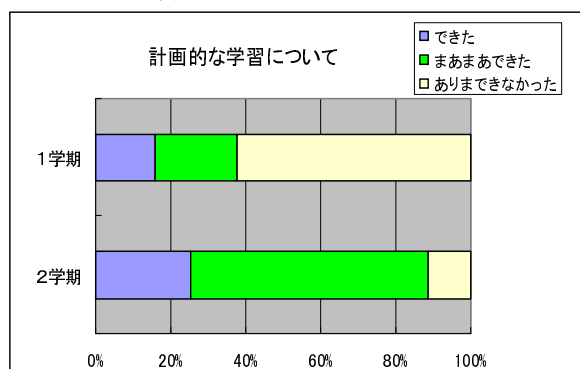
【定期テストについての意識調査】



1 学期		
1.頑張れた。	2. まあまあ頑張れた。	3. あまり頑張れなかった。
15人	118人	206人
2 学期		
1.頑張れた。	2. まあまあ頑張れた。	3. あまり頑張れなかった。
91人	212人	36人

※実施対象：全校生徒（339名）

【計画的な学習に関する意識調査】



1 学期		
1.できた。	2. まあまあできた。	3. あまりできなかった。
54人	74人	211人
2 学期		
1.できた。	2. まあまあできた。	3. あまりできなかった。
86人	215人	38人

※実施対象：全校生徒（339名）

③考察

「学習意欲」に関する実態調査の結果、以下のような点が見られた。

- ・「シラバス利用についての調査」の結果、1学期に「シラバスを利用していない」と回答した生徒は約79%であったものが2学期には、約28%に改善された。
- ・定期テストについての項目にある1学期に「頑張れた」と回答した生徒は約4%であったものが2学期には約26%に上昇している。
- ・計画的な学習についての項目では、1学期の「あまりできなかった」と回答した生徒は約62%であったものが2学期には約11%に改善された。

上記の結果は、シラバスをもとに教科の学習が進められていることへの理解が深まった結果だと考えられる。また、計画的な学習を行う際、シラバスが有効であると生徒に理解された結果だといえる。シラバス利用を進路ウィークや家庭訪問で促すことによって、「学習意欲」を喚起させることができたと考える。また、計画的に学習を行うことの必要性を教員が伝え、知らせることによって、計画的に学習を行えば、「目標は達成できる」という「学習意欲」を生徒にもたせることができたと考えられる。

【視点2：学力向上に関して】

①評価の視点

「学力向上」にかかわる取組について具体的な評価を行うために、以下の項目に着目して実態調査を行い検証した。

- ア 定期テスト（国語・数学）の各学期平均点の比較
- イ 定期テスト（国語・数学）の無解答傾向調査
- ウ 「習熟度別少数人数指導」生徒の学力傾向調査
- エ 全国学力・学習状況調査の2回（4月・2月）の結果比較

②結果

【定期テスト（国語・数学）の各学期平均点の比較】

教科	1学期中間		1学期期末		2学期中間		2学期期末	
	国	数	国	数	国	数	国	数
1年	±0	±0	-5.1	-3.8	+2.1	+1.1	+1.9	-0.3
2年	±0	±0	-6.2	+4.4	+0.8	+3.2	+0.6	+1.3
3年	±0	±0	+1.3	-1.2	+2.8	-0.1	+0.6	+0.8

※表記した数値は1学期中間テストの平均値を基準とし、平均点の上下のポイント差を示している。

※実施対象：1年生（102名）、2年生（124名）、3年生（113名）。

【定期テスト（国語・数学）の無解答傾向調査】

教科	1学期中間		1学期期末		2学期中間		2学期期末	
	国	数	国	数	国	数	国	数
1年	3	4	1	2	0	3	0	1
2年	2	5	1	3	0	4	0	1
3年	2	4	2	4	0	2	0	1

※表記した数値は無解答の人数を示している。

※実施対象：1年生（102名）、2年生（124名）、3年生（113名）。

【「習熟度別少人数指導」生徒の学力傾向調査】

教科	1学期中間		1学期期末		2学期中間		2学期期末	
	国	数	国	数	国	数	国	数
2年	-20.4	-30.2	-18.4	-16.7	-17.8	-3.4	-12.3	-12.5
3年	-22.3	-40.1	-12.5	-27.9	-16.5	-5.8	-8.9	-11.4

※表記した数値は1学期中間テストの平均値を基準とし、平均点の上下のポイント差を示している。

【4月に実施した全国学力・学習状況調査の再テスト結果】

	国	数
2月実施	A：+4	A：+6
	B：+1	B：+2
無解答者数	0	0

※表記した数値は4月の全国学力・学習状況調査を基準点として正答率のポイント差の上下を示している。

※国・数のA・BはそれぞれA問題、B問題を示している。

※実施対象：3年生（113名）

③考察

「学力向上」に関する実態調査の結果、以下のような点が見られた。

- ・定期テストにおいては、1学期の定期テストを基準とした場合、2学期では概ねプラス傾向になっている。
- ・1学期に見られた無解答生徒の数が、国語に関しては2学期に入り0人になっている。
- ・「習熟度別少人数指導」の生徒の平均点のポイントが1学期の中間テストと2学期の期末テストでは、大きく上昇している。
- ・全国学力・学習状況調査の再テストでは、正答率が国語・数学ともポイントが上昇し、無解答者数が0人になっている。

上記の結果は、従来より本校で取り組んできた実践の上に本年度重点的に取り組んできた「朝読書」、基礎学習、家庭訪問による個別の学習指導、習熟度別少人数指導の実施、学習会の実施等の取組によって、授業内容の基礎的な部分の定着が見られるようになった結果のあらわれと考えられる。特に、基礎学習の時間に行う国語の漢字の書き取り・読み取り、数学の計算練習による学習結果が無解答の生徒の数を減少させたと考えられる。

【視点3：規範意識に関して】

①評価の視点

「規範意識」にかかわる取組について具体的な評価を行うために、以下の項目に着

目して実態調査を行い、検証した。

- ア 授業開始時におけるチャイム着席の実態調査
- イ 提出物の実態調査

②結果

【授業開始時におけるチャイム着席の実態調査】

月	1 学期				2 学期			
	4	5	6	7	9	10	11	12
1 年	2	2	0	1	1	0	0	0
2 年	4	5	3	2	1	0	0	0
3 年	5	6	4	4	1	0	1	0

※実施対象：1年生（102名）、2年生（124名）、3年生（113名）。

※示した数字はチャイム着席ができなかった日数を示している。

【定期テストに関連する提出物の実態調査】

教科	1 学期中間		1 学期期末		2 学期中間		2 学期期末	
	国	数	国	数	国	数	国	数
1 年	5	6	3	2	2	3	0	0
2 年	4	6	3	1	0	2	0	0
3 年	3	4	4	4	1	2	0	0

※実施対象：実施対象：1年生（102名）、2年生（124名）、3年生（113名）。

※示した数字は定期テスト前後に行われた提出物の未提出者数を示している。

③考察

学力向上に関する実態調査の結果、以下のような点が見られた。

- ・3年生の1学期には授業開始時におけるチャイム着席ができなかった実態が2学期にはほとんど見られなくなった。
- ・全校的に1学期に見られた未提出者が2学期の期末テスト後には見られなくなった。

上記の結果は、生徒指導部を中心に行った授業移動時や休憩時間における取組、授業者が授業開始5分前に各クラスに入るという取組、また、「学習規律」についての理解を求める家庭訪問の取組の結果であったと考えられる。つまり、教職員の「学習規律」に対する姿勢や家庭訪問での家庭学習の必要性を伝える取組により生徒に「学習規律」を培うことにつながったと考えられる。

※なお、分析・考察は推進委員会を中心にして行った。

3. 取組について成果と課題

【成果】

- シラバスの利用、「基礎学習」、「習熟度別少人数指導」によって、生徒は主体的かつ計画的に学習を進めるなど「学習意欲」を高めることにつながった。また、プリントを中心としたスモールステップ型の学習方法は、生徒個々の「学習意欲」を高めるだけでなく、家庭学習の定着等の学習に対する積極性を生み出していくことになった。
- 進路ウィークや学習会を行うことによって、学習のつまづきを生徒自身だけでなく教員も知ることができ授業における学習指導に生かすことができるようになった。また、「学習会」等の授業以外の補習的な取組が、生徒に「やればできる」、学習内容が「わかった」という生徒個々の意識を生み出し、「学習意欲」を高めることにつながった。
- 「学習規律」や「規範意識」の取組が基礎学力の向上や「学習意欲」の喚起につながることになった。本校でも生徒の「荒れ」と学習意欲は密接な関係があることは、以前から確認されてきた。しかし、今まで、「学習規律と『低学力克服』」、「学習意欲と『荒

れ』について検討されてきたものの各学年や教員個々の力量に任されていた現状があった。今回の取組を通じて、学校全体で「学習規律」について徹底すれば、より落ち着いた学習環境を作り出せることが分かった。また、家庭訪問による教員と保護者との連携が生徒の「学習規律」や「規範意識」に反映することを再確認できた。

【課題】

- 「学習意欲」については、今回の取組で一定の成果が見られた。しかし、一方では自らの進路に不安を抱き学習に対する前向きな姿勢をもてない生徒がいることも確かである。これらの生徒に対して学習意欲を高める手立てについて検討していくことが不十分であった。そこで以下の点を次年度も継続して行いたい。
 - ・シラバスの活用実態調査
 - ・「やればできる」という達成感をもたせる学習方法についての検討
 - ・学習意欲をもてない生徒への対策
- 「学力向上」については、国語・数学を中心に検討してきた。しかし、国語・数学以外の教科に関して十分な実態調査を行うことができなかった。次年度では全教科にわたって、低学力傾向の分析・検討マクロな視点で行う必要がある。
 - ・そこで以下の点を次年度も継続して行いたい。
 - ・各教科での学力の傾向分析・検討
 - ・分かる授業を行うための研究授業の実施
 - ・定期テスト等の分析
- 「学習規律」については、重要課題となっている「低学力と生活課題」の問題を分析・考察し、取組を行ってきた。しかし、生徒の背景にある生活実態を十分把握するには至っていない。このことを踏まえ次年度では「なぜ、提出物がきちんとできないのか。」等の原因をより深く追究し、生徒の実態を把握した上で、「生活課題」と「学習規律」について分析・考察する必要がある。
 - ・そこで以下の点を次年度も継続して行いたい。
 - ・家庭訪問の継続的实施
 - ・生活実態の分析・検討
 - ・家庭学習の定着実態調査

上記の点を踏まえ、本年度実施した取組を継続していくことが今後の課題である。